株式会社ワーク
代表取締役 田中知加

RWBが指名し、ポルシェとの親和性が高いワーク。
多彩なデザインとサイズバリエーションを誇る数少ないブランドだ。
とはいえ、金属加工は鋼板と熱とプレスは男の世界だ。
このトップを引き受けたのが業界には珍しい女史、田中知加。
継承と新時代へ向かうワークismとは何か。

RWBが指名したワーク

世界に通用するジャパンブランドのひとつとして、世界各地にそのファンを抱えているワーク。特にＪＤＭをキーワードとした日本車カスタムの世界では注目度も高く、カルチャーの中心を担うほどだ。もちろん、国産車への対応だけでなく、ポルシェに対応するモデルも数多く用意されているのはワークの特色と言えるだろう。

ＰＣＤ１３０を採用するポルシェにとって、ホイールの選択肢は限られてしまう。その点で言えばワークの製品ではＰＣＤ１３０のモデルも充実している。さらにリム幅のカスタムオーダーにも対応しているため、ディープリムの選択肢も魅力となっている。

我々ポルシェオーナーがワークの存在を確かなものとしたのは、ＲＷＢの存在が大きい。クラシカルなデザインを現在にアレンジするにあたり、かつての９３４／９３５のようなディープリムは外せない。

また、ＲＷＢスタイルは単なる懐古趣味ではなく、チューンド９３０で９９６カップ／９９６Ｒとの真っ向勝負を勝ち抜くためのパフォーマンスを有しているからこそ、スタイリングだけのカスタマイズとは一線を画して世界が評価したのだ。つまり、ホイールからするとスタイルとトラクションを両立する機能部品としても選ばれているのだ。

幼い記憶に残るワーク黎明期

初代社長は田中毅。知加は娘だ。普通に考えると、初代の引退に合わせて順当に娘が後を継いだとなるのだが、これがすんなりとはいっていない。その紆余曲折に入る前に、ワーク黎明期を知加の記憶で辿ってみよう。

生産のスタートは１９７４年。起業化の創業は１９７７年となる。まさに第一次チューニングカーブームの真っ只中に誕生したというわけだ。

「ワークが活動を開始した頃、私は３歳くらいだったのかな。今のような会社ではなく、どちらかというと東大阪の商店というか、金属加工屋さんみたいな感じでした。父と仲間、そして母、まさに家内制のこじんまりとしたスタートでした。だから幼いながらも家業として手伝っていたことも覚えていますよ。出荷するホイールの本数を、おはじきを使って伝票整理のお手伝い。家族社員一丸の日々でした。ただ、子供心には仕事ではなく遊びの延長のようなもので、まわりにいる大人もクルマ好きのおっちゃんが集まってワイワイ楽しんでいるって感じ。だから仕事としてのピリピリしたムードもなく、楽しく過ごせました。中学生頃までずっと現場にいましたよ」

現在の企業規模からは想像し難いが、初代を中心とした少数精鋭＋家族というメンバーでスタートしたワーク。知加にとっては家業であると同時に、まるで弟のような存在として一緒に成長していった。

田中家の食卓

楽しみながら家業を手伝っていた知加だが、青春を謳歌すべく高校生になると一旦は現場を離れることになる。

「高校生になるとずっと無給で手伝っていることに疑問を持つようになってしまったんですね。しかも学校の授業で英語に興味をもったところなので、高校２年の時に留学しようと決意したんですよ。幸いにして得意科目だったため、親には隠れて申し込んだ英会話スクールの選抜として、無料で留学できることになったんです。親の負担なく留学できる状況を作ったうえで説得して、１年間だけアメリカの高校に留学しました」

その後は得意の英語を伸ばすべく、京都外国語大学に進学。もちろん、初代もこの英語力を放っておくことはなく、海外からのお客さんの対応に駆り出されることになる。

文：渡邊大輔［Daisuke Watanabe］
デザイン：中根康宏［Yasuhiro Nakane］
写真：島崎ミユキ［Miyuki Shimazaki］
取材：ワーク／WORK　大阪府大阪市長田西4-1-3　06-6745-1133　https://www.work-wheels.co.jp

仕事伝。

海外担当の部署を設立するため、正式な入社オファーがあったんです。というのも、今いるメンバーに実践的な英語を覚えさせるより、英語が話せる私にホイールのことを覚えさせた方が早いと。その通りだと答えたところで、自然と入社する流れになってしまったんですよ」

それからはホイールに関する情報を猛勉強し、海外からの問い合わせにも対応。さらに海外の代理店を開拓するため、欧米から中東、ロシアなど飛びまわる生活を送ることとなる。

「でも、20代後半って仕事できる風な勘違いをしがちな年齢じゃないですか。そんな時に先代にいろいろな勘違いした提案とか苦言とか言っちゃったんですよ。そしたらすぐにクビ。そのまま勘当されてしまったのです。ＢＯＲＯの大阪で生まれた女を流しながら東京に向かうわけですよ」

守るものがある強さ

そのまま荷物をまとめて東京へと飛び出した知加。英語力を武器にした持ち前のバイタリティと貪欲な知識欲は見知らぬ土地の東京でも衰えることはなかった。すぐにミサイルや航空機の部品を扱う専門商社に勤務し、防衛庁や自衛隊に通う日々を送るようになる。しかし、そんな生活を変えたのが、アメリカで発生した９・１１の同時多発テロだ。

「それまで自衛隊に通っていても、お茶を飲んで新聞を広げている人もいるんですよ。でも９・１１以降は有事として、その人たちが日本のために働く姿を見るわけですよ。オンとオフの切り替えがすごい。覚悟があって自衛隊に入り、守るものを持つ人間の大きさというか強さというか。改めて家族との関係や仕事の責任について考えさせられましたね」

このタイミングで突然、父からの電話が鳴った。

「何事もなかったかのように、東京に来ているから飯でも食おうって。ちょうど海外で日本車のチューニングブームが盛り上がりはじめたころで、海外営業チームの人員が足りないというのが話の内容ですが、そろそろ帰ってこないかと言われたんです。結果としては幼い頃から一緒に育ってきたワークを思い、２度目の入社となりましたが、今の仕事も国のためになっておもしろい。家業にも親しみがある。悩みました。が、父が頭を下げてきたのだから戻るかなと」

この頃からワークは世界規模での急成長を遂げることとなる。そんな中でプライベートな諸事情によって、またもやワークを離れることとなったのだが、数年後に三度目の復帰となった。

「数年後に父が体を壊し余命宣告を受けてしまったんです。そこでいつもの田中家の食卓。父から『きみと仕事をしていた時が一番楽しかった』って言葉をかけられて…。当初は父とともにワーク設立メンバーだった叔父が会社を引き継ぐと思っていたのですが、父から私に会社を引き継いでもらいたいと言われたんです。これまで出たり入ったりを繰り返していましたが、やっぱりワークは家業であって、大切な家族の一員なんです。だから、自信はなかったけど守りたいって思うようになっていったんですね」

伝えることの大切さ

海外営業部時代やこれまでの社会人経験では、伝えることの重要性を学び、実践してきた。その根底を現在も持ち続けながら、新たに社長として知加は何を伝えていくのか。

「自分は営業のプロフェッショナルではないし、製造やプロモーションに関しても専門ではないんですよね。でも、私の人生はザ・ワークなんです。クルマに関しても、まわりのみなさんよりも知識は少ないのですが、それでも自分の好き嫌いは確かにある。それを伝えることはワークの遺伝子を受け継いでもらうことになるのかな。もちろん、伝えるなら本当のことを知りたい。だからまだ勉強し続けていて、今も知らないことがあったらすぐに聞いちゃいます。みんなプロフェッショナルだから専門用語を使って教えてくれるんですけど、幼稚園児でもわかるように教えてくださいって言います。まだまだみんなに育てられている最中ですね」

ユーザーに対して、今の製品を伝えるのは当然の仕事。それに留まることなく、さらに幅広い知識と経験を学び続け、そこから生まれるアイデアも伝えていく。もちろん、大切な「弟」でもあるワークのＤＮＡを守り、次の世代に伝えることも知加に課せられた大切な仕事だ。

ワーク第二楽章の始まり。どんな旋律が響くのだろう。

「とにかく英語が好きだったので、日本で英語を話せる機会が得られることは嬉しかったですよ。だからホイールやクルマの専門用語とかは分からなかったんですが、仕事をさせられているといった苦痛はなかったです」

ここまでワークでの仕事をこなしていると、必然的に大学卒業とともにワークへ入社するのは自然な流れと思われる。しかし、大学卒業時に教員免許を取得し、別の道へと歩み出すこととなる。

「卒業後は塾の講師をはじめました。その後、阪神大震災を機に友人から誘われた旅行代理店に転職したのですが、経験はゼロなわけです。それこそ、世界中の航空便から観光情報まで調べまくって、様々なお客さんの要望に応えられるようになりました。この経験から、知らないことを調べる重要性と、必ず答えが見つかるということを学ぶことができました」

その頃になると家内制金属加工屋から『会社』へと進化し、業績も安定&上昇。そんな企業の社長令嬢だったのだが、ぬるま湯に浸かる生活ではなかった。課題を探し、見つかると答えを探す。こうした貪欲とも言えるパーソナリティを作り上げたのは、初代がこだわった『家族揃っての夕食での会話』にある。

「だいたい夕食は２～３時間くらいかかっていました。というのも、仕事の話からプライベートな話まで、１日の出来事をずっと話すんですよ。そこで父のいろいろな話を聞いて、学べることも多かったんですよね。だから、話を聞き出す方法なんかも身につきましたし、何よりも話す、伝えるということの重要性もこの『田中家の食卓』で知ることができたのだと思います」

満を持しての入社から、まさかの解雇

20代では塾の講師や旅行代理店などに務め、ホイールメーカーとは違った社会を学んだのだが、その転機は29歳の時に訪れた。

「いつものように家族の夕食の際に、父から